

# 小説「サマネイ」(続編)

多谷 昇太

## 「(三) 山本僧侶」の続き

觀光客にまじって日本の寺のようにいかめしい山門などない至って開放的な境内に入る。どこが宿坊なのかさっぱりわからない。ちょうどその辺りをうろついていた小坊主に俊田が気さくに声を掛けた。十二、三才くらいの少年僧侶が愛想よく応じてくれたがあいにく言葉が全然通じない。タイ語いっさいわからぬ身でどうやったら「得度の申し込みに来た、日本人僧侶に会いたい」と伝えたらいいのか、少年は英語もほとんど解さなかった。しかし気合いで俊田が話を通じさせると、自分と少年の頭を撫でる風をしながら「ムンク、ムンク、ジャパニーズムンク」と何回か連呼して辺りを指さし「ウエア(どこ)?」を云うと、少年は大きくうなづいてくれた。話を通じたようだ、ついて来いという動作に甘えてそのまま案内をしてみよう。正面の金堂に向かって左手の方、何の木なのか菩提樹のような形のいい木々が生い茂っている一角へと我々は入って行った。やがて平屋のモルタル造りの建物が現れ

る。それが宿坊だった。そのまま中に入って取り次いでくれるのかと思ったら少年は俺たちに合掌したあとすぐに行ってしまった。致し方なく二人して中に入る。間口十間ほどの、中に回廊状の廊下のある宿坊内はシーンとしていた。表は南国の太陽が照りつけてカッと暑い表口と裏口などが吹き抜けになっているせいか中はさほどでもない。上がり口が四、五間ほどあつて広く、部屋が回廊に沿ってならんでいた。俺たちは少しの間誰か出て来ないかと無言で佇んでいた。俊田も同じような塩梅だったが日本も含めて始めて入る宿坊というものの雰囲気をつかもうと、俺は五官を研ぎ澄まして建物内の様子を探っていた。得度の動機や女買いななどのことを思えば云えた義理ではないが、これくらいよいよこで僧侶生活を送るのかなどと思えば、自分がビルマの堅琴の水島上等兵にでもなったような、殊勝な気持ちにさえなる。誰か出て来たら取り敢えず合掌でもしようか…。

しかし暫く待ったが誰も出て来ない。俺たちは怖ず怖ずと交互に声を出し始めた。「ハロー」と取り澄ました声で取り次ぎを乞うのだが皆昼寝でもしているのかしらん、いっかな誰も戸を開けて出て来ない。そのうち俊田が臆することのない竜馬の本領を發揮してくれ

た。「ハッロー！エニバデイヒア！」と大音声で宿坊内に声をとどろかせる。だが本来そうすべき俺と来たらずっかり恥ずかしくなつてしまい、また意気消沈もして声が出ない。まるで一晩の宿と食事を乞う乞食が無視されているように思えたからだ。漫才の掛け合ではないが「かあちゃん、もう帰ろうよ」と云つて退散したいくらいだ。が、それを知つてか知らずか俊田は一向に怯まず、いよいよ声を上げるうちに左側一番手前の扉が勢いよく開いて、中から上半身裸の筋骨隆々としたムンクが一人飛び出して来た。「アーツ！」と俊田に負けぬ大声を上げてドスンドスンと床を震わせながら大股でこちらにやつて来る。拳でも握つていたらそのままブツとばされるのではないかと思えるくらい勢いだった。色が浅黒く目が細い、典型的なマレー系の顔立ちをしたタイ人僧侶だったが、僧侶というよりはムエタイ戦士、いや動く仁王像といった感じである。俊田は知らず俺はすっかり萎縮してしまう。

実際山門の仁王像がなかった代りにここでその洗礼と検問を受けている感が俺にはあつた。そのゆえは度々述べた。

さすがにいきなりの迫力に押されながらも俊田が英語を駆使して来訪の要件を伝える。だが先程の小坊主

同様こちらのムンクも殆ど英語など解さぬ様子だ。困つて顔を見合はす俺たちにしかし「ヤマモート？ヤマモート？」としかるべき人物の名前を彼が出してくれた。ありがたい「イエース」と二人して答える。件の帰国した仏教大学生から、俺の世話係として山本なる日本人僧侶の名を聞かされていたのだ。彼を頼つて俺たちは来たのだつたが、いま図らずも仁王様からその名を聞かされたわけである。場所はここで間違ひなかつたわけだ。しかしそれならなぜその山本僧侶本人が出て来ないのだろうか？館内中に響くような大声で俊田がアナウンスしたにも関わらず、である。些かでも気に掛かるところではあつた。ともかく、俺たちの訪問の意を知つたムエタイ僧侶が左から右へ例の調子で歩いて行き、回廊の右側の、こちらも一番手前に位置する（という事は俺たちの声が一番よく聞こえてしかるべき部屋だ）部屋の戸を遠慮もあらばこそかなりの勢いで叩き始めた。「ヤマモート！ヤマモート！」と怒鳴る。するとやおら戸が開いて中から背の高い、こちらも上半身裸の（こちらは色が真つ白だ）僧侶が目をこすりながら出て来た。「オマエニキヤクダ。ナゼデテコナイ？キコエテルンダロ！」（セリフがカタカナなのはタイ語である。感じで、こう云つてるんだらうと

想像して語を入れた」とタイ僧侶が詰問する。しかし「オオワカッタ。ソウオコルナ」と山本に軽くあしらわれたようで、ふてくされながらムエタイが行こうとするのに「おい、ソムスイ、マツテロ。イマオマエヲシヨウカイスルカラ」とでも云われたか彼は立ち止まった。山本僧侶がこちらに向き直る。「やー、どうも。昼寝をしたもんで気づかなかった。それで：どちらが村田さん？」と聞いて来たが断じて気づかなかったはずはない、それを怪訝に思いながらも「私です」と俺が返事をする。「瞬鋭い眼光で俺を睨んだあとで「こちららは？」と俊田の存在を尋ねる。俺が答える代りに俊田が自分で、自らと俺がここに至る経緯までを簡単に代弁した。件の、本来俺が変わってここに居べき仏教大学生のことなどをだがしかし聞くまでもなく山本はその本人から直接聞いていた筈だ。「彼（俺）が心細そうなのでついて来ました」まで聞くと山本は鷹揚にうなずいて「ああ、そう。じゃあお二人とも上がって。私の部屋に入って」とやっと招いてくれる。ではとばかり靴を脱いで床にあがろうとすると「あ、待って。いま部屋かたづけけるから」と我々を制し、更にムエタイに向かつて何事か一言云った。すると突然「バカヤロ！×××××！」とムエタイが日本語の罵り言葉をま

じえて何事か云い返した。あとから判ったことだがおそらく「お茶を淹れて持ってきてくれ。四人前な」とでも山本がタイ語で云ったのに対し「バカヤロ！オチヤグライジブンデイレロ！」とムエタイが抗議したのに違いない。突然の「バカヤロ」発言に俺たちは驚いたがこれ以後何回も二人の間で耳にすることになる。当然山本が教えたのだろうがしかしこれによって二人の間の気の置けない間柄が容易に察せられた。

招じ入れられた部屋の広さは六畳ほど、床は板の間でカーペットも何もない（大体暑くて必要ない）。奥に窓が一つだけあってその下に寝台が置かれ寝台の下はなぜかカーテンで隠されていた。家具と云えばそれと小さな卓袱台が一つきりだ。僅かな私物は一ヶ所にまとめて置かれ普段の簡素な生活ぶりが伺える。卓袱台を囲んで三人は胡坐をかいて座りその我々に扇風機が心地よい風を送ってくれる。ムエタイがお盆に冷茶を載せて持って来てくれた。そばで見る彼の身体はなおもの凄くその彼がいそいそとお茶を出してくれるのに俺はひたすら恐縮する。その様子を見ながら上半身裸から片肌だけを出した僧の正装になっていた山本が「こいつ名前はソムスイと云うんですよ。ぜんぜん怖くないから安心して。私が手なずけてあるから。（ソム

スイの顔を見ながら)バカヤロ:も私が教えたの。な、ソムスイ?」と云うと自動的にソムスイが「バカヤロ」と返す。俺と俊田は吹き出してしまった。「なーにがバカヤロだよ。せっかく人が紹介してやってんのに」と云茶化しながらもかく俺と俊田を彼に紹介する。と云つてもどちらがムンクになるのかという程度のことだ。彼の年は二十三才とのこと、ついでに云えば山本は三十過ぎ位に見える。「こいつね、前兵士だったんだけどその兵役を嫌がって今坊主なんかやってんの。プロの僧侶でも何でもないから気使わなくていいですよ。な、ソムスイ?そうだろ?」「バカヤロ」。日泰の漫才コンビを見るようで面食らいながらもおかしかったが、それにしてもこの嚴ついソムスイを手駒にするとはこの山本という人物の器量が慮られた。俺だったら端から無理だし俊田でもはたしてどうか、あとから聞いてみたいところだ。しかしそれにしても彼はなぜ、こういうシチュエーションで俺たち、いや俺を迎えたのだろう? 始めの狸寝入りと云いきつい一瞥と云い何か気になるどころだ。自分が応対に出ないことでソムスイの激高を図ったとも思える。要するに「追い返せ!」というやつだが考え過ぎだろうか。ともかくそのソムスイと適当に漫才を演じたあと彼を自分の部屋に返し、

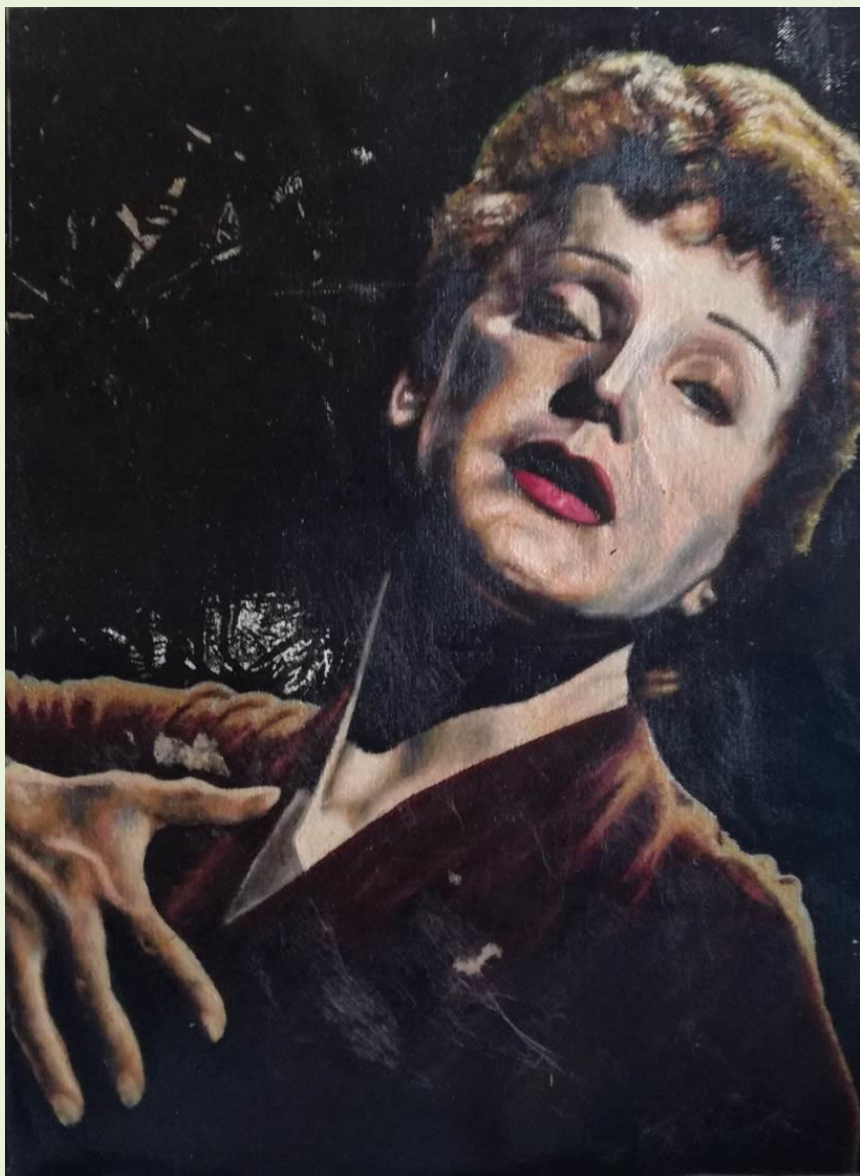
やおら山本は今度は俺の人と形を探り始めたようだ。「あー、ドタバタと失礼。とここでおたくも大学生と聞いたけど、どこの大学でしたっけ?」と初っ端から痛いことを聞いて来た。実はこのサマネイ、留学をするのにも学生であった方が好ましいと俊田を通じて仏教大学生から云われ、「そんなの適当でいいよ、どうせ証明書なんか要らないんだろ」との俊田の忠言も合わせ受けて、俺は日本の某大学生を名乗っていたのだ。自分の特技を考えて某美術系の大学名を詐称していた。申し遅れたが俺は自称絵描きをみずからに銘じている。ヨーロッパに行ったのもランボーのみならず例のエコール・ド・パリを味わおう、みずからに演じてみようとしたが為である。すべて自己流だが俺は人物画を、就中女性のそれを描くことをトリトリとしていた。アングルの「泉」を見ればため息が出るし、ピュグマリオンの後姿を見れば戦慄する。分けても「モナリザ」は驚異だった。よく息をするがごとき、生けるが如き名画と云うが俺に云わせればモナリザはその上を行っていた。あのモナリザは逆に息をしていない。その代り永遠の相を呈している。つまり、あの肖像は人間ではなく霊のそれであるということだ。イザベル・デステでもなんでもなく、天才レオナルド・ダ・

ヴィンチは四次元以降の存在を、ふつう人間の目には見えない、人間の技では描けない、霊、をキャンバス上に現出せしめていたのだ。換言すればヘルマン・ヘッセ著「デミアン」で描くところの恋人であり母であり、聖女であり同時に悪女もしくは売女でもある「永遠の女性・エバ」を我々に見せてくれていた。俺はあさほかにもこの永遠の女性を自分も描こう、いや描けるとしてみずからに架していたが、それは前にアフガンで俊田に述べた「人は何のためにあるのか、生きるのか」ということを追及するなど云ったことともあわせ、実に蒙昧無知、不遜の至りだった。そう期す、そう憧れるのは勝手だが凡夫のできることで断じてなかったからだ。人は、特に若いころは自分を誇大に見がちだ。俺はそのことによく気がきつつあり、ひよっとして今その矯正院としてこれから寺に入るのかも知れないのだった…。

おっと、横道が過ぎた。山本氏を待たせてはいけない。彼の審問を受けねばならなかった。

(以下次号)





かつて絵描きを目指していた頃の拙絵です。